Akmy
黒羽根天使III
～妖精襲来～
泡蔵
AWAZO

目次

第一章　エルのいない薫のエッチな生活

1　虜の薫　4
2　それは突然現れた　17
3　ミュウの災難　27
4　妖精欲情ス　37

第二章　色々のんびりしてられない

5　父からの手紙　54
6　薫……男へ　65
7　男の快楽再確認　72
8　解き放たれた薫　91

第三章　人間・薫の天下？

9　魔鬼の早計。美姫の思惑。　106
10　ミュウの目論見　120
11　欲望は限りなく　128
12　薫再び……　138

あとがき　151

イラスト・KUN

第一章　集まる集まる亜人種達

1　虜の薫

薄暗い部屋の中、少女の荒くなった息遣いが聞こえていた。
その声はコンクリートで作られた壁に反響し、より艶めかしく部屋の中を響き渡っている。
「ハァハァハァハァハァ……」
声の主は大方の予想通り青葉薫であった。
薫は両手を手錠で拘束され天井に固定された鎖で吊されていた。またその長さが絶妙で、座り込めない微妙な高さになっているところが拘束者の意図を感じる。しかもその姿はシチュエーションにピッタリと言わんばかりにあられもなく、スカートは脱がされているわ、ブラウスのボタンは全て外されているわ、ブラジャーは着けられていないわのなんとも目の保養になる身なりをしていた。この期に及んでチラチラと見え隠れする小さな胸が気になるのか、必死に隠そうと身をよじる姿が、抱きしめたくなる程可愛らしい。
「アウッ……もうダメ……もうダメなの……」
上気した顔を上げ、誰もいない部屋の中を見回す。
艶めかしい姿とは裏腹に、この危機的な状況――
まさか誘拐されてしまったのだろうか？
躰が感じやすくなりすぎているため、かなり危うい生活を送っている。たちの悪い男に目を点けられても不思議ではない。もしや、毎日のようにつきまとっていた痴漢男が、暴挙に出たのだろうか。

しかし、薫を誘拐するにはクリアしなければならない生涯が沢山出てくる。
摩訶不思議な人生を送っている薫の周りには、人間以上のパワーを持った人物（？）が何人も控えている。それだけでも易々と薫を誘拐できる人間がいるとは思えない。それに薫の表情からは、欲情の色が浮かんでいるものの焦っている様子は伺い取ることはできなかった。
ならば、これはどういうことなのだろう。
やはりエル達の仕業なのだろうか？　たちの悪い考えを持っている連中だ。このくらいの意地悪は笑顔でこなす。
なんとなく予想ができてきたが、現在薫は艶めかしい姿で吊されているのだけは事実。そして、薫が欲情していることも。
「お願い……外して……こんなコトされたままじゃおかしくなっちゃう」
男の股間を直撃しそうな台詞を言っているが、感じすぎる薫の躰を考えるならよく我慢していると言っていいかもしれない。
スラリと伸びる綺麗な脚には、いったいどれくらいの量が出るのか不思議になる程の愛液が流れ落ち、足下には水溜まりが出来上がっている。
薄いピンク地のシマシマパンティーは、毛細管現象によって大半が濡れ、浸食を更に広げていく。
その原因を作っているのは股間で小さなモーター音を響かせながら小刻みに振動しているローターで、その振動はもう何時間と続いていた。しかも、ローターは最弱に設定されているのだからたまらない。こんな微弱な振動ではイきたくともイけないのだ。そして意地悪はまだまだ続く、コントローラーはこれ見よがしに胸ポケットに入れられているが、拘束されている薫にはどうすることもできず、まさに蛇の生殺し状態であった。
「もうダメなの……ボク壊れちゃうよ……お姉様……美姫お姉様。お願いです。ボクもう我慢できません！」

悲痛な叫びが部屋の中に木霊する。

薫は美姫に監禁されていたのであった。まぁ、予想通りと言えば予想通り。これはあくまでプレイの一環なのである。

今日は日曜、美姫に〈プラーナ〉を吸って貰う日――

薫は美姫のマンションを訪れた途端こんな仕打ちをうけていた。それにしても、マンションにこんなプレイルームまであるとは……確かに美姫の部屋は高級マンションの最上階。お金に不自由はないと言っても、なんと言ってこの部屋を作って貰ったのだろう。やはり魔神の力を用いたのだろうか？

それはいいとして〈プラーナ〉を吸って貰うため美姫のマンションに来たというのに、何故こんなことになってしまったのだろうか？

なにもできない状況でローターを入れっぱなしにされているなど、今の薫にとっては拷問でしかない。全く美姫はなにを考えているのだろう。まぁ、ろくなことを考えていないのは、この状況を見れば良くわかる。

「お姉様……ゴメンナサイ……もう許してください。ボクもうダメッ！　立っていられません……」

そうは言っても絶妙な位置で固定されているのでしゃがみ込むこともできない。しかも、手首を固定しているのが手錠なので体重をかけることもできず、薫は生まれたての子鹿のように足を振るわせながら立っているしかなかった。

「アッアッ……もうダメッ……もうダメです……美姫お姉様……助けて……」

助けてと言うのは正解ではない。この状況は美姫が作り出しているのだから助けてくれるわけがない。とは言うものの美姫はこの状況を何処かで見ているはずである。薫にも視線は感じるので、必死で呼びかけているのだ。

その悲痛な叫びに応えたのか、正面にある重々しい鉄の扉がゆっくり開かれると、美しい微笑を浮かべた美姫が姿を現した。

「お姉様……お願い。ボクどうにかなっちゃいそうです……今日はボクの〈プラーナ〉を吸ってくれる日じゃないですか……だからお願いです。早く〈プラーナ〉を……」

「そうなの〈プラーナ〉だけ吸ってあげればいいのね。それじゃあ〈プラーナ〉だけを吸うことにしましょうか？」

意地悪な笑みを浮かべながら近づいてくるとソッと頬を撫でる。

その言葉に薫は寂しそうな表情をする。瞳には涙まで浮かんでいる始末だ。

「違うの……お姉様の意地悪……ボクに触って……いっぱい気持ちよくして欲しい。ボクをいっぱいイカせて……お願いします」

薫は震える足で必死に躰を支えていた。こうしている時も、微弱なバイブレーションが断続的に躰を刺激しているのだからたまったものじゃない。

「そうねぇ。薫がそこまで言うのであれば、いっぱい気持ちよくしてあげてもいいわよ」

「本当ですかお姉様。お願いします。ボクを……ボクを無茶苦茶にして下さい」

表情がパッと明るくなる。美姫に抱かれることを想像するだけで軽くイッてしまっているのではないかと思う程だ。しかし、これが本当に元男の表情だとは信じられない。すでに男であった時の感覚など忘れてしまっているのかもしれないが、この表情は女の喜びを心の底から味わおうとする牝の顔であった。

「わかったわ。それじゃあ、もう少し経ってからしてあげましょう」

「そんな……なんで今じゃないんですか。ボク、もうダメなんです……だから……」

「ダメよ。ちゃんと時間は守らなくっちゃ。待ち合わせの時間を守らず勝手に早く来たんですからね。いけないのは薫なのよ。わかる」

敏感になっているのをわかっていて耳元でそう囁くと、もう一度意地悪な笑みを浮かべた。その笑顔は心底楽しんでいる顔である。

薫は、約束の時間より3時間も早く訪れたのだった。

当然、美姫もそんなことは予想していたらしく、薫が恥ずかしそうに頬を染めながら立っていても驚きもしなかった。

ようは薫が快楽に負け約束の時間まで我慢できず押しかけてきたのだ。

直ぐに抱いてくれるものだと思っていたのだが、美姫がそんな薫の思惑通り行動をするわけもなく、軽く愛撫をしてからコンクリート張りの部屋に閉じこめると、別の部屋から紅茶を飲みながらゆっくり観察していたと言うわけだ。全く、ドSっぷり全開である。

「それは……それはわかってますけど……ボク我慢できなかったの……じゃあ、せめて手錠を外して下さい。このままじゃ本当におかしくなっちゃう……」

オナニーでもして慰めておかないと本当に狂ってしまう。しかし、そんなことを言っても美姫が「はいそうですか」と外してくれるわけがない。

「それはダメよ。すぐ時間になるからもう少し待ちなさい。エルちゃんと魔鬼は来てるけど雪柊(ゆらぎ)と晴希がまだ来ていないのよ。そうだ。薫も一緒にリビングで待っていましょう」

またなにか思いついたらしく嬉しそうな笑みを浮かべると手を軽く横に振って鎖を断ち切った。そして、直ぐに鎖の先端を掴むと手が下がらないようにする。ほんの僅かな時間ですら自分で愛撫させないつもりらしい。

「いや……もう許して……お姉様、ゴメンナサイ……ボク、ボク……」
涙を流し躰を美姫にすり寄せる。なんとかして美姫をその気にさせようとするが、百戦錬磨の美姫が、そんなことで動じる訳がない。
「ダメよ。さぁ、ちゃんと歩きなさい」
躰を突き放し鎖を引くようにして無理矢理リビングへ連れて行く。薫は震える躰に力を入れ、必死になって美姫の後に着いていくが今にも倒れそうだ。
そしてリビングでは、これまた悲惨な光景が広がっていた。
「姉さん！　これが弟に対する仕打ちか！　ここから出してくれ！」
「美姫姉様。お帰りなさいませ」
魔鬼は部屋の端にいつの間にか現れた檻の中に閉じこめられていた。まぁ、魔鬼のことだ。エルに手を出そうとしたか、黙って薫を襲いに行こうとして閉じこめられたのだろう。
喚き続ける魔鬼のことなど綺麗サッパリ無視をする美姫、そこに魔鬼など存在すらしていないと言いたげだ。
「エルちゃん。ちょっとこの鎖持っててくれるかしら、薫が自分でしないように見張っているのよ」
「はい美姫姉様」
そう言って薫を受け渡すと美姫は玄関に向かった。その数秒後チャイムが鳴る。気配で雪柊達が来たことを悟っていたらしい。
「薫、凄く濡れていますわよ。それにもう我慢できないって顔していますわ」
「エル……エル。ボクどうにかなっちゃいそうなの……お願い。なんとかして」

ソファーに投げ出されると今度はエルを求めた。そんな顔を見ていると誰でもいいようにも見えるが、薫は薫なりに求める相手を選んでいるつもりだった。

前回の騒動で今まで以上感じやすくなっているのでどうなるかわからないが、思いを寄せているエルを求めるのは自然なことだろう。これで、魔鬼にまで求めるようなら、おかしくなったと疑うべきだ。

「そんな顔をしてもダメですわ。今日は美姫姉様に無駄な〈プラーナ〉を吸い取って貰うために来たのでしょう。わたくしが、手を出すわけにはいきませんわ」

こんなに艶めかしい薫を見ても、エルは美姫と同じような態度を取るだけだった。全く神人にしても魔神にしてもドSしかいないのだろうか。

「でも、本当に可愛いですわ。昨日わたくしとしている時とまるで別人ですわよ。さすが美姫姉様ですわね。薫ったら完全に調教されてしまっていますわ」

腕を固定し、躰を撫でるようにして悪戯をする。

しかし、それ以上のことはしない。下手な悪戯をしてイかしてしまったら美姫になにをされるかわかったものではない。その辺はちゃんと心得ているエルであった。

「ハアアアアアァァァ……イヤァァ……もっとしっかり触って……アウッ……ダメェェ……もっともっとぉぉぉ」

そんなことをされて、たまらないのは薫である。股間の微弱なバイブレーションに加え胸への軽い愛撫。まさに快楽地獄であった。

「あらあら、ダメでしょエル。そんなことをしたら薫が可愛そうよ」

そうこうしている間に、雪柊達を迎えに行った美姫がリビングへ戻ってきた。

「あらら、薫ちゃんもうこんなになっちゃってるの。私達が呼ばれたんだから絶対にこうなるとは予想してたけど早くない」

なにも聞かされず呼び出された雪柊と晴希だったが、マンションに到着して直ぐ、こんな光景が飛び込んでこようとは予想していなかった。

「そうなのよね。本当は3時に来る予定だったんだけど、どうも我慢できなかったみたいなの。ホントいやらしい子になってしまったわね薫は」

「本当だぞ。女の子がそんないやらしい顔をしていいのは好きな男の前だけだ」

晴希のとんでもない一言が飛ぶ。冷静に話しているようだが、晴希の股間は大きく盛り上がっていた。まぁ、健康な男子なら当然の反応だろう。

「ハァハァハァ……そんな……ボクの躰がこんなになったのはみんなが悪いんじゃない。みんながボクを抱いちゃったから感じやすくなっちゃったんだよ……それなのに……そんな言い方するなんてヒドイ……」

快楽に潤んだ瞳を晴希に向ける。睨んでいるのだろうが、晴希の股間を刺激するだけの効果しかなかった。まぁ、薫の躰をよりいっそう感じやすくした原因を作った人物が集結しているのだ。薫だけ悪くいわれる筋合いはない。

「そうよねぇ、全く晴希も少しは反省しなさい。薫もそんな言われ方されたら可愛そうよね。これは少し罰を与えないといけないかしらね」

美姫の唇が歪む――

その笑顔を見ただけでこのメンバーを集めた理由など想像がつく。当然素直に、薫の〈プラーナ〉を吸うためではないのは誰の目にも明らかだ。

そんなことは晴希達にも想像が着いたはずなのに、ノコノコ美姫の元へ着てしまうのは、やはりバンパイアである美姫のフェロモンが原因なのだろうか。

「それじゃあエル、もういいわ。雪柊、薫をベッドルームへ連れて行ってもらえるかしら」

「えっ、私がですか？　はい、わかりました」

なにもわからず雪柊は肩にかけていたバッグをソファーの横に置くとエルから鎖を受け取り、薫の躰を支えた。

「さぁ、あなた達も私の後についていらっしゃい。魔鬼あなたもよ」

そう言って、一度指を弾くと魔鬼を拘束していた檻が消えた。

「全く、なんで僕がこんな目に遭わなくちゃならないんだ」

「無駄口叩いてないで早く来る！」

「はははは」

ブツブツ文句を言っている魔鬼をたしなめ、美姫達は大きなベッドルームへと入っていった。

「雪柊、カギはベッドの横に置いてあるから薫を自由にしてあげて、でも、まだ手を出しちゃダメよ」

「はい」

薫をベッドに寝かし手錠を外す。すると薫は直ぐにローターを抜き取り雪柊を押し倒した。

「雪柊……雪柊ぃ……ボクもうダメなの。なんとかしてぇ」

欲情した薫が雪柊の胸に顔を埋め身をよじる。

そんなことをされて、本来雪柊が黙っているわけもないのだが、美姫の言葉が効いているらしく、頭を撫でるだけでその先をしようとしない。誰もが美姫の言葉には逆らえないのであった。

「さぁ、あなた達はそこに座りなさい」
「なんでそんなこと――」
「いいから早く座る！」
強い口調に、エル達三人は、慌てて美姫の前に正座した。その姿はまさにしかられている子供のようである。
「あの……美姫さん。なぜ俺達はこうしているのでしょう」
この期に及んでも、なぜ正座させられているのかわからない晴希は、間抜けながらも説明を求めた。それはエルも同じだったが、魔鬼だけはいつもこのような仕打ちを受けているので、既にふさぎ込んでいる。気分次第で魔鬼をイジメるのだから、今更理由を聞いたところで悲惨な運命が待っていることは変わらないと諦めているようだ。
「下半身の反応は早いのに意外と鈍いこと言うのね。三人が薫をこんな躰にしちゃったのは、この間説明したからわかっているわよね」
「はい、まぁ……」
「よろしい。それで、薫だけヒドイ目に遭っているのは、ちょっと不公平かなぁ～って思ったのよ」
「ちょっと待て、今の薫さんの状況をわかってそんなことを言っているのか！　散々、我慢させられ、殆ど監禁状態で快楽の拷問を受け続けていたと言うのに、よくもそんなことを言えたものだな」
今までふさぎ込んでいた魔鬼が、息を吹き返したかのようにまくし立てる。確かに、薫の躰が感じすぎてしまう状況を作り出した原因の一端は魔鬼も担っている。しかし、それをヒドイと言うならば、今の状況も十分ヒドイのではないだろうか？
「うるさいわよ」

魔鬼の反抗に不機嫌な顔を見せると容赦など微塵も見せず美姫の手刀が魔鬼の額を貫いた。

「ぴょおぉぉ！　ね、姉さん。抜いて、抜いて」

黙らせるのはこれが一番とでもいわんばかりの行動である。本当に魔鬼にはめっぽう厳しい美姫であった。

「ホント口だけは達者なんだから。いいこと。薫はあなた達のせいであんな躰になってしまったのよ。それを私が〈プラーナ〉を吸うことで少しは抑えてあげようと言うの。あなた達は黙って私がすることを見ていなさい！」

そう言い終わると、どこからともなくロープが三人に飛んできて躰を縛り上げた。付け加えておくが、このロープはいくら神人や魔神と言えども切れるような代物ではない。しかも、縛り方はなんともマニアックな亀甲縛りである。

「み、美姫姉様。見てなさいと申されますと……わたくしたちが、美姫姉様と薫のこれからする行為を見ていろと言うことですの」

今そう説明を受けたにも関わらず、エルは確認するかのように繰り返した。

いったいこんなことをしてどうしようと言うのだ。まぁ、二人のＳＥＸを見て興奮に耐えられなくなるのは普通に考えれば晴希くらいなものであろう。エルと魔鬼は腐っても神人・魔神である。他人のＳＥＸを見たところで欲望に支配されることなどない。

「そうよ。まぁ、私も淫気を発散させますからね。それと薫のも増幅するから、ちゃんとエルちゃんにもお仕置きになると思うわよ」

「ひっ！　美姫姉様……お顔が笑っていらっしゃいますわ。も、もしかして――」

「楽しんでいる」の言葉は続けられなかった。当然、三人にお仕置きをすることが本来の目的ではない。自分が楽しむためにセッティングしたまでのことだ。

「さぁ、私の淫気に何処まで耐えられるかしらね。天界学校４年生の実力を見せて貰いましょうか」
「美姫姉様、待って頂けませんか。あ、あの、聞いていらっしゃいます。美姫姉様ぁ」
そんなエルの言葉など聞く耳を持たず、美姫はきびすを返すとベッドに歩み寄った。
ベッドの上では薫にすり寄られている雪柊が真っ赤な顔をしている。雪柊は雪柊で、この拷問のような状況に耐えていたらしい。
「よく我慢しましたね雪柊。いい子ですよ」
「いえそんな……でも、私はどうしたらいいんですか？　私も少しは悪いところがありますけど……直接薫ちゃんの躰をどうこうした訳じゃないんですが……」
散々薫をおもちゃにして遊んでいたが、感じやすくなった原因を作ったわけではない。
「そうね。まぁ、雪柊は私のサポートとして呼んだだけだから安心しなさい。でも、私がしてあげるのは後、まずはオナニーでもしていなさい。あっ、イキそうになったら言うのですよ。〈プラーナ〉を吸ってあげますからね」
「はい」
頬を撫でられた途端虚ろな顔になり、薫から躰を離した。
「さぁ、薫。私の方にいらっしゃい。待たせたわね。うんと可愛がってあげるわよ」
「ハアアァァァ……はい、お姉様……ボクをいっぱい可愛がって下さい」
疲れた笑顔を見せ胸に飛び込んでいく。そして、二人はベッドの中へ沈むと同時に、美姫の指は薫の秘裂に差し込まれ、もの凄い勢いで動き出すのだった。
「アアアァァァァ……お姉様凄い……イクッ、イクゥゥゥゥ」

今まで我慢していた欲望を一気に爆発させるように絶頂を迎える。しかし、その絶頂は美姫のテクニックにより途切れることなく襲いかかってきた。

「アアアァァァァァ……そんな……凄い、凄すぎるぅぅぅ」

悲鳴に近い喘ぎ声が、エル達の鼓膜を刺激する。

「凄いですわ……薫の顔……凄くいやらしいですわ……」

鼓膜が性感帯と直結してしまったかのように刺激する。

「また……またイクゥゥゥ……止まらないのぉぉぉぉ……」

続けざま、最高の喘ぎ声がベッドルームを包み込む。

「ぐあっ！　凄い淫気だ……ちょっと姉さん……もう少し抑えて」

「ダメですわ……全身がムズムズします」

「なんだこれ……」

一気に吹き上がった淫気に、エルと魔鬼も欲情してしまっている。晴希に至っては気が狂ってしまうのではないかと思える程だ。

「気持ちいい……凄い、凄いのぉ……」

エル達の苦しみなど気にもせず、薫のなんとも言えない幸せそうな喘ぎ声がベッドルームに響き渡った。

それから数時間――

強力な淫気に、ミル達三人はとてつもない欲望を覚え、ため込んだ欲望を発散できない苦しみに耐え抜くことになるのだった。